

清水のまちなかが変わる！

清水は高度成長長期、臨海部に工場が立ち並び、製材業は活況を呈し、多くの貨物船や漁船が寄港し、造船業が盛んで、まちは活気にあふれていました。しかし、1980年代をピークに人口は徐々に減ってきました。そこで静岡市は、国際海洋文化都市をめざす3つの基本方針のもと、静岡県、民間の皆様と連携して新しい清水都心づくりに取り組みます。



基本方針1 中心部への生活機能の集積

高齢化が進む社会で住みやすいまちは、静岡市内に住む誰もが公共交通機関を使って便利に生活できることだと言われています。

そこで、JR清水駅から静岡鉄道・新清水駅のエリアに、市庁舎や文化会館などの公共施設、総合病院などの医療施設、商店、飲食店、ホテルなどを集積させたコンパクトなまちづくりに取り組みます。

①新「清水庁舎」の建設

現在の清水庁舎は、想定される大地震に対して一定の被害を受け、業務の継続に支障が生じる可能性があります。

そこで、新しいスタイルの「清水庁舎」を、由比や蒲原などからも電車でも来庁しやすいJR清水駅東口公園(市有地)に移転することについて平成29年度から検討をはじめ、2年間で基本構想を策定し、6年後の竣工をめざしたいと考えています。

②JCHO桜ヶ丘病院の移転

現在の桜ヶ丘病院は建築後57年が経ち、老朽化が深刻です。2001年に当時の病院を経営していた社会保険庁が病院移転地3haを大内新田に取得したため、静岡市は厚生労働省に病院相続と早

期改築を要望してきました。

しかし、社会保険庁は2009年に廃止され、病院の経営は2014年からJCHO(独立行政法人地域医療機能推進機構)に移行。JCHOは、病院経営の観点などから、大内新田への移転を白紙撤回して、新たな移転候補地の選定を静岡市に依頼。静岡市が情報提供した候補地2箇所のうち、多くの市民が通院しやすい現在の清水庁舎の場所への移転を2017年3月7日に正式決定。移転時期は、新「清水庁舎」の竣工後になります。

③回遊性を高める

JR清水駅を中心に公共施設が集積する江尻地区とウォーターフロントの日の出地区をめぐりやすくするため、新たな交通手段も検討し、清水港線跡遊歩道で賑わい空間を創出します。

基本方針2

魅力に満ちた観光機能の向上

観光サービス産業や海洋エネルギー産業などの新産業を創出するため、大型クルーズ船が寄港しやすい国際客船ターミナルや、海洋学の研究機能を備えた海洋文化拠点を整備します。年間を通じて、まち全体をひとつの劇場に見立て、まちのあちこちで行われる多彩なイベントに参加できる、わくわくドキ